

1. 住み慣れた地域で最期まで過ごせる街を作る 「笑大学校」

2. 愛知県弥富市

3. 愛知県厚生農業協同組合連合会海南病院 ヘルパーステーション たすけっと

4. 訪問介護第1係長

5. 東 元子

【取り組みの概要】

当事業所は、「いい介護の日」にちなんだイベントを、2010年から自主開催しています。当初の聴講者は数名でしたが、現在では100名を超えるまでに成長しました。

スタッフが劇団を立ち上げ、「もみじおばあちゃん一家」を舞台に、毎回「笑い」を提供するとともに、介護時事問題を投げかけています。介護時事問題には、「認知症患者の増加」「介護人材不足」「意思決定支援」等を全国の状況だけでなく、この地域の実情を織り交ぜ、より身近に感じてもらえるようにしました。

参加・協力機関は、地域包括支援センター・行政・民生委員・医療機関・介護機関・県立高校介護福祉科などに拡大しました。

訪問介護事業所による、最期まで過ごせる街づくりを紹介します。



【当事業所の概要】

当事業所は、愛知県の西部に位置し、海部医療圏における公的医療機関の役割とともに、名古屋市西部から三重県北西部地域の急性期治療を担う海南病院に併設しています。

在宅介護事業部門には、訪問介護・訪問入浴・訪問看護・訪問リハビリ・居宅介護支援・通所リハビリを備え、地域住民の在宅生活を応援しています。



【経過】

日々の訪問介護業務の中で、認知症患者の増加と、「どう接したらよいかわからない」という家族介護者の増加をスタッフみんなが感じるようになりました。そこで、私達専門職が現場で得た経験や知識を発信し、認知症を正しく理解してもらう目的で、寸劇や介護相談会を始めることにしました。2008年に定められた「介護の日」を活用して、毎年1回継続開催することにしました。

認知症初期にみられる症状や日常生活の場面をシナリオに仕立て台本を作りました。スタッフは仕事の合間を縫って練習を重ね、小道具や衣装を調達しました。「住み慣れた近所を散歩しているだけで徘徊」と言われてしまう事例を盛り込み、「認知症患者は何も理解できない困った人」という偏った見方に終始してしまうのではなく、「感情は保たれている」「尊厳ある対応が大切」「認知症になっても地域で暮らせる」などを伝えました。笑いを織り交ぜた寸劇にして、楽しみながら学び、来年以降も継続して聴講していただけることにも力を入れました。

2013年度には現在の原型となる形で毎年開催するようになり、寸劇を披露し、介護相談会を行っていました。この時点では、家族の悩みや愚痴を聞くに止まりましたが、聴講者に記入してもらったアンケート用紙をもとに、少しずつ内容を見直しながら数年間開催しました。回を重ねるごとに認知症介護には家族や介護サービスだけでは賄えないことがたくさんあり、近隣住人にも、正しい理解と対応を求める必要があると考えるようになりました。そこで、地域包括支援センターに「私達に何が出来るか？」と相談を持ちかけました。すると、私達のイベントを2部構成にし、第1部では「もみじおばあちゃん一家」の寸劇を、第2部では地域包括支援センター所属の認知症キャラバンメイトが、認知症サポーター養成講座を開催する運びとなりました。コラボレーションすることで、双方の集客力や専門的視点が作用し、とても充実した「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」イベントになりました。この頃から、行政や主要機関の職員が休日にも関わらず、聴講していただけるようになりました。

2017年度分を開催し、その振り返りの際に、「認知症サポーター養成講座は、地域でたくさん開催されてきたので、他の介護時事課題に取組もう」と考えました。そこで、地域包括支援センターにも加わってもらって次のテーマの検討を重ねた結果、介護の日の趣旨である「介護家族や介護従事者を応援する」ことをテーマに据えて取組むことにしました。

2018年度は、第1部の寸劇の視点を、「認知症の理解と対応」から、「介護の専門家が実践する認知症対応」にシナリオ改訂し、専門家が実践している技術を紹介しました。第2部では、地域包括支援センターが介護人材不足やEPA、介護ハラスメントなどの時事課題を講話し、介護サービス利用者や地域住民が、介護従事者を大切にしていくことが重要であることを伝えました。それでもなお、介護の仕事を選び、この地域を選んで勤務してくれている若手介護職員や外国籍介護職員を招いて、登壇してもらいました。登壇した介護職員達には、仕事ぶりやこの道を選んだきっかけ、やりがいや苦勞を伝えてもらい、市民一同名義の感謝状をひとりひとりに贈呈しています。この取り組みは、登壇いただいた職員のモチベーションを上げ、派遣いただいた機関からも離職防止に喜ばれ、また、地域のお機関から招くことで、聴講者が地域の施設を知る機会にもなり、高い評価をいただきました。

2019年度はさらに欲張り、「意思決定支援」をも盛り込むことにしました。認知症患者にどう過したいかをしっかりと聞き取っている診察場面を、併設する海南病院老年内科の野々垣医師に医師役そのままに演じていただき、「人生会議」についてミニ講話もしていただきました。



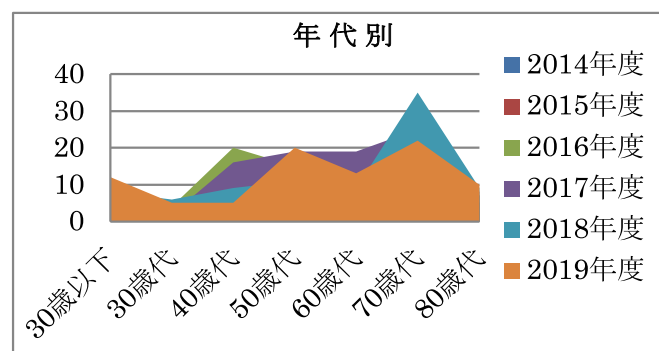
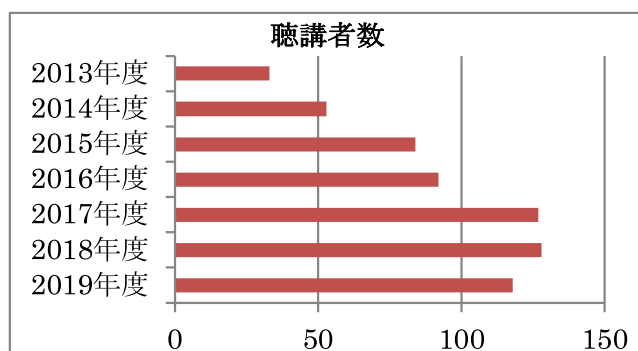
【評価】

アンケートの自由記載欄には、以下のような記述が多くありました。

- ・ 高齢社会に向けて、今から考えておくことの必要性を感じました。寸劇とても良かったです

- ・ 楽しく拝見しました。本人と嫁のどちらの本音も出てよかったです。これからもよろしく
- ・ 毎年、もみじおばあちゃんに会えるのを楽しみにしています
- ・ 介護職のおかげで、介護されている方も幸せだと思います。ありがとうございます。大変な仕事ですけどがんばってください
- ・ ご苦勞の多い仕事に優しく辛抱強く対応して下さい、ありがとうございます。私も明日のことと認識していますので、その際はよろしくお願ひします
- ・ 自分ではかなわないお仕事。皆さんがやさしく、いつも感謝です。いつもありがとうございます

聴講者数は以下に示す通り増加しました。40歳代から70歳代の聴講者が多く、特に70歳代の参加者が多くありました。なかには、80歳代の親を連れた親子参加や、小学生の子どもを連れての親子参加もみられました。



2013年度から2017年度には、認知症サポーターを389人養成することに貢献しました。

地元住民だけでなく、隣接する市町村・他県からの参加が増えました。

地元社会福祉協議会や近隣市町村からも、劇団に講演依頼をいただき実施しました。

【展望】

以上のように、数年かけた取り組みにより、地域住民の認知度が進みました。地域包括ケアシステムの推進において、住民の参画を後押しする大切な社会資源の一つと考えています。

普段の訪問介護業務は個人への直接支援が主となりますが、地域に向けたイベント事業に取り組むことは、スタッフ個々の課題意識やモチベーションの向上に繋がりました。

また、イベント事業自体も、個々の介護相談に応じるに留まらず、同じような悩みや問題を抱える人が地域にはたくさんいて、それを地域の共通課題、介護事業所の共通課題として捉え、色々な立場の人が一緒に取り組むことの大切さに気づきました。

人生会議やACPと表される、人生の最終段階をどう過したいかを考える意思決定支援が推奨されています。主に医療者やケアマネジャーが力を入れている領域ですが、訪問介護事業所にも介護職員にも、重要なキーワードだと考えています。また、家庭に入り込む訪問介護事業所だからこそ「8050問題」や「貧困生活」の実情を間近で目にします。これらの個別の訪問介護を実施することはもちろんですが、それを市民や関係機関に地域課題として提供し、一緒に取り組み続けることを目指します。地域の介護サービス提供体制の歯車として、且つ、最期まで過ごせる街づくりの協働機関として、地域包括ケアシステムの一翼を担っていくことを目指します。